

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：24301

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K18363

研究課題名（和文）中米・カリブにおける感覚のエスノグラフィーに関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical study on the ethnography of the senses in Central America and the Caribbean

研究代表者

滝 奈々子（Taki, Nanako）

京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・非常勤講師

研究者番号：70571553

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は中米・カリブにおける音楽・ダンス・絵画や写真等の表象芸術を中心としたポピュラーカルチャー現象に焦点を当てD・ハウスのセンススケープを描写する「感覚のエスノグラフィー」の開発に挑戦したものである。グアテマラではケクチ先住民の民族音楽を演奏者の身体感覚と伝統の継承から分析し、カリブ海沿岸のガリフナ文化では絵画描写と表現技法とその消費を明らかにし、プエルトリコではレゲトンとサルサという音楽をそれぞれアフロ感覚とソネオの口承伝統との交錯という点を分析しその成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

感覚の人類学研究は、身体論、現象学、宗教、移民などとそこから派生する固有のテーマをもち、その対象地域は、西洋世界あるいは非工業化していない非西洋社会を対象にしてきた。この研究では先住民音楽のインターネットでの情報発信、伝統絵画ではなくペイントをつかった商業あるいは非商業的な壁画、レゲトンやサルサなどローカルな演奏文脈からメディアを通じた情報発信とその消費など、をそれぞれの感覚経験とどのように交錯するかについて考察している。ネット社会における情報の圧縮と、携帯端末というメディアを通じた直接感覚経験を直結した紋切り型でない分析方法を提案している点で斬新である。

研究成果の概要（英文）：This study challenged the development of an 'ethnography of the senses' that describes D. Howes' sensescapes, focusing on popular culture phenomena in the Central America and the Caribbean, particularly in the representational arts such as music, dance, painting and photography. In Guatemala, we analyzed the folk music of the Q'ueq'chi indigenous people in terms of the performers' physical sensations and the transmission of traditions; in the Garifuna culture of the Caribbean coast, we clarified pictorial depiction and expressive techniques and their consumption; and in Puerto Rico, we analyzed the music of reggaeton and salsa in terms of their intersection with the Afro sensibility and Soneo oral tradition, respectively, and presented the results in various academic media.

研究分野：民族音楽学

キーワード：感覚経験 エスノグラフィー 中央アメリカ カリブ海地域 民族音楽 ポピュラー音楽 ガリフナ  
プエルトリコ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 感覚の人類学研究に対する期待

当初、この研究計画は、中米グアテマラ共和国とプエルトリコ、ホンジュラスをフィールドとして、おもにマヤ系ならびにガリフナ民族とメスティソにおける音楽・ダンス・絵画や写真等の表象芸術を中心としたポピュラーカルチャー現象に焦点を当てた新しい書記法 (=記述法) の開発に挑戦するというものであった。すなわち、従来の「観たことを記述する」書記法に加えて「観察者がどう感じたか」を記述に導入する「感覚のエスノグラフィー」という観点を取り入れるというアイデアがあった。その素材対象として、先住民社会におけるポピュラーカルチャーとりあげ、音楽・食・絵画・写真・ダンスなどの民族表象が、外部社会との接続により様々な文化要素の世界循環するさまを紹介する。そして、先住民社会ならびにその民族表象を受け入れる当事者を中心とした感覚の語りや経験と、そこに共存する観察者の経験の語りを接続させて、一種の二つの視座から総合的に考察するというものであった。

このような研究姿勢が求められたのは、この「感覚記述」の方法に関する刷新について学界からの期待があったからである。つまり、感覚経験の人類学とは、感覚/感性を被観察者と観察者の両サイドからの記述をおこない、それらを一つのエスノグラフィーの記述にまとめあげるという計画であった。

### (2) センススケープ論に着目して

このような試みは、デイビッド・ハウズによるとセンススケープ (sense-scape) への配慮があってこそ可能になる。センススケープは文字通り、センス (感覚) が生起する情景や状況のことである (Howes 2005)。アルジュン・アパデュライ (Arjun Appadurai 1996) が提唱したモダニティを具体的に表象する5つのスケープ、つまり、エスノ、メディア、テクノ、ファイナンス、そしてイデオ、が冠されるスケープ (ethno-, media-, techno-, finance-, ideo- scape) に加えて、ハウズは第6のスケープ (sixth scape) と称されるものを提案した (Howes 2005:69)。それがセンススケープであった。振り返ってみれば、センススケープの提案の以前にも、これまでにさまざまなこの種のタイプの情景や状況についての研究の提案があった。例えば、民族音楽の Steven Feld, 視覚表象の Oliver Sacks, メディア研究では Marshall McLuhan ら、また、記憶における Susan Stewart, シャーマンの女性性における Susan Stewart, 料理における Lisa Law, 匂い経験の Jim Drobnick など、それぞれのセンスに着目した研究の提案があった。

このことを、中米ならびにカリブ海地域で試みるのが、本研究において私たちが提案した点である。民族音楽学者、文化人類学者、歴史研究者がそれぞれ、共通の理論的枠組みを共有し、それぞれが持っている学問分野の方法論でアプローチするとともに、各研究者が自分の分野がもつパラダイムの限界を超えて領域横断的なこの研究領域でオリジナルのアイデアを生産することが求められたのである。

## 2. 研究の目的

最初になぜ感覚の人類学が重要なテーマになりえるのかということ、研究班で研究初年度にブレインストーミングした。そこで次の5つの段階を通して「感覚経験のエスノグラフィー」が必要になることを確認した。その5つの目標 (段階) とは以下のとおりである ; (1) 感覚の人類学とは、人間の身体の人類的研究であることを認識する。(2) 身体の人類的研究には、さまざまな学問領域 (医学、心理学、教育学、芸術学、哲学、そして文化研究) からのアプローチが必要である。(3) 身体の人類的学の必要性はなぜか? ——それは人間の身体や五感 (=おもに感覚経験を形づくるものと言われているもの) の普遍性ならびに斉一性と、感覚を含む身体経験が文化の違いにより非常に多様な姿 = 現象を取りうるということが仮説として考えられるからである。それゆえ、(4) 人間の身体や五感 (=おもに感覚経験を形づくるものと言われているもの) の普遍性ならびに斉一性を基準にして、感覚を含む身体経験の文化的に多様な形態を記述する方法を探究する必要がある。(5) これらの方法は、感覚経験のエスノグラフィーを書く (writing ethnography of sensory experience) というプロセスから導き出されるという予測を立てた。

つまり、感覚経験のエスノグラフィーの書記法 (writing) のシステムとその書記法を支える理論的枠組みを、事例研究を通して探求されなければならないという結論に到達した。それが本研究の目的となった。

## 3. 研究の方法

上掲のように、研究の目的は、感覚経験のエスノグラフィーの書記法のシステムとその書記法を支える理論的枠組みを、事例研究を通して探求することであった。そのための方法は以下の3つの柱からなった。

### (I) 先行研究の文献レビュー

感覚の人類学研究とは、人間の身体の普遍性ならびに斉一性を基準にして、感覚を含む身体経

験の文化的に多様な形態を、経験的に明らかにすることである。すなわち「人間の身体に関する記述体 ( writing corps on human corps )」に関する文献レビューをおこなう。

#### (II) 先行研究カテゴリーの分類

すでに存在している、感覚経験のエスノグラフィーの文献的渉猟と、いくつかの(手本になる)代表作を仔細に分析して、どのようにして、そのような感覚経験を記述することが可能になったのかについて考察する必要がある。特色となる感覚記述とその成功の可否の理由を探究し、それらの間に、研究アプローチの違いを析出する。つまり、先行研究をなんらかの形で分類することを試みる。

#### (III) 感覚と情動現象のモデル探求のための議論

感覚経験のエスノグラフィーの評価を質的な良さ/悪さだけで判断するのではなく、感覚経験のエスノグラフィー記述のモデル概念を確立し、それを支える社会的要素や、行為者による情動や感覚の飼い慣らし ( taming ) プロセスに着目する。

### 4. 研究成果

#### (1) 情動・感覚の定義と領域の確定：先行研究のレビューから得た結論

COVID-19 流行のもとで初年度と二年度の中期までは収集した文献の情報解析に充てられた。池田 (2013) は、本研究課題の着手に先立ち「情動の文化理論にむけて」という論考を発表している。クリフォード・ギアーツは、早くも 1973 年の『文化の解釈学』のなかで、感情もまた文化的創造物であることを指摘している。民族誌を書く以前の人類学者の常識的推論から可能になることを表現して彼はこう述べている。

「われわれの精神労働は、外的世界自体における出来事のパターンに関する情報の収集から、情緒的意味の決定へ、つまり出来事のパターンの情緒的包含へと転換する。われわれは問題の解決ではなく、感情の明確化にかかっている。にもかかわらず文化的資源、ならびに十分な公的象徴体系の存在は、指示的思考の場合と同様に、この過程にとっても本質的である。それゆえ「ムード」「態度」「感覚」等——それらは感動や動機ではない、状態や条件という意味における「もろもろの感情」——の発展・維持・消滅は、指示的「思考」同様、人間における基本的に私的な活動とみなすわけにはいかない」(Geertz 1973:81)。

ギアーツは感情経験は決して私的なものではなく、文化的社会的な表現行為であるとしている。感情

	個人	集合
情動	語りに還元される心理	コミュニタス経験
感覚	共在経験を通した観察	共在感覚

情動と感覚経験をどのように記録するか？

出典：池田光徳「情動の文化理論にむけて」<https://navymule9.sakura.ne.jp/130320Emotion.html>

(ないしは情動：emotion, affect) は神経生理学的変化によってもたらされる精神状態であり、思考、感情、行動反応、快不快の度合いなど様々な関連性がある。残念ながら定義に関するコンセンサスは現在においてもそれほどあるとは言えない。感情はしばしば気分、気質、性格、性質、創造性と絡められていることがわかるだけである。それゆえに、情動と感覚の記録は、いっけん何を記述してもよいように思える。しかしながら、そこに、個人と(デュルケム流の)集合表象の共有を可能にする集団という軸で構成されるマトリクスのなかに何が表現されるのかを描いてみると、情動と

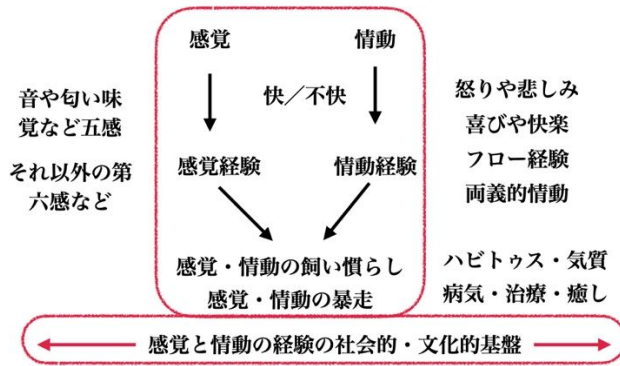
感覚は容易に四象限のなかで分類することが可能になる(図を参照)。ギアーツの言う情動や感覚の社会的共同性の特色が現れている領域がわかるはずである。

そのことから、感覚経験は、個人にとっては、共在経験を通した観察であり、集団にとっては、いわゆる「共在感覚」や「共在経験」の記述に焦点化されれば、より「適切な」表象表現とすることができる。例えば、音楽や絵画の感覚経験を記述するとは、その個人の語りに還元される心理現象を説明(例：「その時に理由もわからず涙が出たが、きっと私は無意識に感動していたにちがいない」)するのではなく、むしろ、共在経験を通した観察についての記述(例：「その演奏の第三楽章のところでは、演奏家たちの熱演が伝わってきた気がしたが、客席の周りの人たちも手や足あるいは身体で調子を取っているようだった」)が「感覚経験のエスノグラフィー」にとってより適切なものになる。

#### (2) 感覚と情動の社会的基盤に関する理論モデル：方法の探求から得た結論

ギアーツの指摘を受けると次のような疑問が生じる。つまり、感覚とそれと不可分な関係をもつとおもわれる情動が、文化による整形 ( shape ) をうけて、どのようにして、それが最終的な紋切り型の表現として、我々の経験としてパターン化されるのだろうか。次の作図「感覚と情動現

感覚と情動現象とその社会的・文化的基盤に関するモデル



象とその社会的・文化的基盤に関するモデル」にあるように、音や匂いなどの五感から、日常の文化的実践であるハビトゥスやさまざまな治療儀礼などの複雑なプロセスの記述まで、感覚と情動の経験は幅広い社会的・文化的基盤をもつように思われる。図が整理しているように、感覚経験を記述するとは、人間の能力のレパートリーとして考えられるような、「感覚や情動の飼い慣らし (taming)」と「感覚や情動の暴走 (uncontrollable)」の弁証法的なプロセスが、エスノグラフィー記述としての「怒りや悲しみ、喜びや快楽、(チクセントミハイ流の) フロー経験」さらには「両義的情動が」ハビトゥス

や宗教儀礼などの感覚経験や情動が主題化される現場の中で有機的にまとめられることが、表されている。それが、「感覚経験の民族誌・エスノグラフィー」というジャンルを形成しているのである。小栗宏太 (2022) が「情動の人類学」という文献レビューで記述したように、民族誌記述の流行が、ある時点で「情動論的転回 (affective turn)」と呼ばれるようなブレイクスルーが生じるのではないのだ。情動論的転回を感じるのには社会的集会的現象ではなく、論文や著作を並べそれを棒グラフに表現して突出したことを「転回」と誤解することなのである。情動の民族誌という主題は「転回」以前から存在しており、我々の「感覚経験のエスノグラフィー」においても、感覚経験論的転回がある時点で突然生じるという幻想を抱くことに大きな意義はない。

(3) 個別事例調査の成果

研究代表者の滝：2021 年度：滝と池田らは「中米・カリブにおける感覚のエスノグラフィーに関する実証研究」に関する HP を作成、感覚経験の人類学：リーディングスを制作し基礎資料集とした。また、滝がかつて収集したエスノグラフィー資料をもとに、『音と感覚のエスノグラフィー：マヤ・ケクチの民族音楽学』を公刊し、本研究課題に寄与した。また、滝は、記譜に表されないが身体感覚と密に関係する音について論じた。さらに滝は、音楽活動という経験と社会活動への情動的接続について試論を展開した。2022 年度：グアテマラ共和国アルタベラパス県において、ケクチマヤ女性の日常生活における感覚経験について知るため、参与観察を行い、合わせてインタビュー調査との照合をとおして生活実践上における感覚語彙や慣用表現を収集した。また、ケクチ語で歌われる流行歌レゲトンの歌詞を収集し、彼らの情動経験の一端を明らかにした。2023 年度：グアテマラ共和国アルタベラパス県においてケクチ民族の祭礼音楽と女性支援の NGO グループを観察記録した。あわせて、首都においてサカブルテコ先住民の Tujaal Rock のメンバーにインタビューをおこなった。彼らのアイデンティティ表象と音楽表現の深いつながりについて確認した。

研究分担者の池田：2021 年度：上掲のようにポータル研究 HP、リーディングスリスト HP 等を作成した。滝との共著の刊行。2022 年度：感覚のエスノグラフィーに関する基礎資料の収集を行い、年度末に行われた打ち合わせ会議において、その方法論の文献レビューを発表した。プエルトリコのサンファンとボンセにおいて、サルサ音楽を中心に現地調査をおこなった。特にサルサの即興演奏であるソネオに焦点をあて、それらが、エルトリコの伝統音楽であるヒバロからブレナにいたる過程で政府が国民音楽として擁護しその発展に貢献していること、音楽形式にあるデシマ (十行詩) というスタンザ (詩連) でおこなわれる厳格な韻律のルールが、サルサにおいてはソネオと呼ばれる即興作詞のなかに反映されていることなどを見出した。

研究分担者の牛島：2021 年度：1846-1848 年の米墨戦争における長年の歴史研究をもとに米墨戦争とメキシコの開戦決定過程について言及した。そこで、メキシコ側の開戦決定における敗戦予想を上回る動機としての大義たる「名誉」の問題を考察している。本研究課題との関連では「名誉」が引き起こす行為とそれに伴う情動の分析を、本研究課題の貢献と評価することができる。また牛島は、19 世紀米国からメキシコへの逃亡黒人の奴隷の動きに着眼し、ラテンアメリカから米国への人の移動を俎上に載せた。それらはプエルトリコの新しい研究視点を貢献することとなった。2022 年度：調査地であるプエルトリコの歴史を押え、プエルトリコ音楽のレゲトンの歌詞の内容分析を行い、そのブラックネス (アフロ性) とジェンダー意識の関係について考察した。2023 年度：プエルトリコのサンファンで調査をおこない、レゲトン音楽とブラックネスについて、プエルトリコ大学の学生にアンケート調査や聞き取りをおこない、2 つの学会発表をおこない、レゲトンとブラックネスに関する研究論文を公刊した。

研究分担者の富田：2021 年度：カリフナの宗教民族誌について考究し、本課題に関する地域研究への寄与をおこなった。2022 年度：富田は、ホンジュラス・カリフナに関する 1990 年代に採集されたデータを分析し、次年度令和 5 年度の同地域を含むベリーズおよびグアテマラでの調査に備えた。2023 年度：ベリーズ、グアテマラ、ホンジュラスのカリブ海沿岸の市町村を訪問し、壁画を中心とした視覚表象を、写真撮影し、収集をした。

(4) 総論的な結論：感覚の人類学から、感覚の人類学「批判」へ

本研究期間に収集した文献資料は 150 点を超えて現在もなお増補中である（感覚経験の人類学 HP）。総合するに、人文社会研究が感覚経験に着目するにつれ、歴史学、社会学、人類学、哲学（主に現象学）等で彼らの研究の初期から断片的に収集記述されてきたものが、個々の研究者によりまとめられ、再考され、そして新規のジャンルとして地歩が築かれてきたと言える。各時代、各学問分野により、エポックを画する代表的な研究や論集がまとめられたが、ひとつの方法論で、ひとつの明確な結果が導出されるような単純なものではない。従来の五感の分類に着目してきた感覚経験の人文社会科学は、クロスモーダルやマルチモーダルといった、それぞれの感覚間の相互作用により個々の感覚がエンハンスされたり抑制されたりすることがわかった。そのため、これまで「第六感」と呼ばれるメタ感覚も超自然的な説明のみならず認知科学による合理的な説明が可能になってきた。

そのような感覚経験を記述するための科学的論述におけるパラダイム転換は、そのエスノグラフィー（民族誌）記述の今後にも影響を与えるであろう。すでに私たちには、コンスタンス・クラセセンや、ナディア・セレメキタスらの西洋現代社会生活における感覚経験の再考というすばらしい業績がある。しかし、私たちは、ニジェールのソング文化研究のエスノグラファーであるポール・ストーラーが 1989 年に指摘したことに着目する。彼は、これまでのエスノグラファーは視覚中心の情報収集に偏っているため、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の役割にとって文化記述から排除されてきている、との確に指摘している。確かにその通りである。例えば理学療法士の民族誌は触覚記述が重要であり、シェフや厨房の人々のそれらでは、味覚、臭覚、聴覚の記述は欠かせないだろう。ストーラーの視覚中心主義への批判は、それだけでは、民族誌が何をテーマに選択するとき視覚以外のものも選択される可能性について深く考えていない。問題はなぜこれまでの民族誌が視覚優位であったのかを思想史のレベルにまで上昇させて考えるべきである。視覚以外のものが選択されても、その感覚が主題化するのかを自然化する研究者の無反省が問題なのである。音楽をテーマにする時には、聴覚優位の主題が優先されるが、多くのポピュラー音楽は歌詞があり、また、ライブハウスでのダンスや飲酒（時にはドラッグ）などの触覚や酩酊の感覚など、マルチモーダルな記述が必要になる。感覚経験を、特定の人種や民族集団の固有のものとする「文化的アサインメント」という発想も回避しなければならない。例えば、ラップやレゲトンという純音楽的鑑賞態度の問題を論じるときに、その音楽がアフロ性や黒人性を持ちうるという主張は、慎重にそのディスコースを批判的に分析するのみならず、誰がどのような文脈のなかで表現するかを考慮しなければ、北米の批判的人種理論（CRT）が指摘するような科学人主義的なインデックスにすぎない疑似科学になるのである。ラップやレゲトンは初期には MTV、現在では YouTube による配信によりそこで視覚的に表象される黒人性やラテン性は人種的差異に還元される場合もあるが、実際にはアパデュライやハウズのいう複数のスケープが存在し、まさにカント的な意味での趣味判断として人種・民族集団の差異をこえた世界性（＝普遍性）が獲得されるのだ。その時には、エスノグラファーも参加する／しなければならない民主的な「趣味判断の議論空間」の世界拡張——昨今の ICT 用語ではコピキュタスな——の経験の中に巻き込まれるのである。

本研究課題が扱った「感覚の人類学」は研究期間満了のために終了する。しかし、ストーラーのいう視覚中心主義を批判的に乗り越えた、「感覚の人類学」批判を推進するための宿題を、研究代表者ならびに研究分担者には今度は与えられたのである。「感覚の人類学」研究に終わりがないというのは、そのような意味からである。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 滝奈々子	4. 巻 4
2. 論文標題 「シンポジウム「リュート・タブラチュアの記譜法を考える」報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 COMPOST	6. 最初と最後の頁 116-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田晃	4. 巻 2
2. 論文標題 ガリフナの宗教民族誌その2 死後の過程とシャーマンたち	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アフロラテンアメリカ研究	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝奈々子	4. 巻 2021年夏号
2. 論文標題 わたしと世直しと音楽と	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「世直し」ノオト』大阪大学C0デザインセンター	6. 最初と最後の頁 10-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝奈々子 池田光穂	4. 巻 4巻
2. 論文標題 音と感覚のエスノグラフィー：マヤ・ケクチの民族音楽学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪大学リポジトリー	6. 最初と最後の頁 5-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/85580	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛島万	4. 巻 (0)
2. 論文標題 ラテンアメリカから米国への人の移動を考える(7) 19世紀米国からメキシコへの逃亡黒人奴隷の動き	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『いえらっく』(42),	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛島万	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 アフロ・ラテンアメリカ研究における若干の問題提起 プエルトリコ研究からの視点ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都外国語大学アフロ・ラテンアメリカ研究会『アフロ・ラテンアメリカ研究』	6. 最初と最後の頁 99-102
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田晃	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 カリフナの宗教民族誌：1990年代の現地調査をもとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『アフロ・ラテンアメリカ研究』	6. 最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田晃	4. 巻 126
2. 論文標題 幼児期における「遊び」と「表現」を観察する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『弘前大学教育学部紀要』	6. 最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田晃	4. 巻 3
2. 論文標題 カリフナの宗教民族誌 その3 死者儀礼における各種音楽	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アフロ・ラテンアメリカ研究	6. 最初と最後の頁 23-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛島万	4. 巻 3
2. 論文標題 プエルトリコ音楽のレゲトンにおけるブラックネスは本当に存在するのか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アフロ・ラテンアメリカ研究	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ikeda Mitsu	4. 巻 7
2. 論文標題 La sombra de Mijail Bajtin en la narrativa de nuestra enfermedad	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Mirai. Estudios Japoneses	6. 最初と最後の頁 15~22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5209/mira.91579	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 池田 光穂	4. 巻 4
2. 論文標題 遺骨返還の倫理をめぐる旅	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アイヌ・先住民研究	6. 最初と最後の頁 257~258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14943/Jais.4.257	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 滝奈々子
2. 発表標題 ポピュラー音楽における感覚経験の検証
3. 学会等名 東洋音楽学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mitsuho Ikeda
2. 発表標題 La sombre de Mikhail Bakhtin en la Naratiava de nuestra enfermedad
3. 学会等名 XV Congreso Nacional y VI Internacional Asociacion de Estudios Japoneses en Espanya (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝奈々子
2. 発表標題 リュート・タブラチュアの記譜法を考える; 鳴ると記すのあわい
3. 学会等名 京都市立芸術大学芸術資源センター「音と身体 of 記譜研究」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 クロノトポスとしてのラテンアメリカ: 地域研究から「ラテンアメリカらしさ」のエスノグラフィーへ
3. 学会等名 第55回日本文化人類学研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 学問の暴力」という糾弾がわれわれに向けられるとき：遺骨返還運動と日本文化人類学
3. 学会等名 第55回日本文化人類学研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 空気と空間づくり」から考えるイノベーション・キャンパスの実現(2)
3. 学会等名 ダイキン工業株式会社・大阪大学共同「2020年度共同研究委受託研究」のフィージビリティ調査研究、最終報告会。
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 自著『暴力の政治民族誌』を裏側からみる、国立民族学博物館共同研究会「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係：20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」
3. 学会等名 (研究代表者：中生勝美)、オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 分析哲学に「検閲」の文字なし：芸術と社会の係留点に関する社会学的考察
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会；テーマセッション「芸術は社会の変容を预言する」落合仁司座長、オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 機械の「心」と対話は可能か? : 大学教育のなかでの審問 (池田光穂、徐淑子、山崎スコウ竜二、井上大介)
3. 学会等名 第6回大阪大学豊中地区研究交流会、オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 牛島万
2. 発表標題 メキシコから見た米墨戦争とマニフェスト・デスティニー
3. 学会等名 第21回ラテンアメリカ研究講座「南北アメリカ研究の課題と展望」 アメリカ合衆国の普遍的価値観とその受容をめぐって、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 牛島万
2. 発表標題 アフロ・ラテンアメリカおよびアフロ・ラティーノ研究における若干の問題提起 プエルトリコ研究から見えるもの
3. 学会等名 京都外国語大学アフロ・ラテンアメリカ研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 富田晃
2. 発表標題 映像作品「ドッグ：ガリフナの祖霊信仰」
3. 学会等名 東京ドキュメンタリー映画祭2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝奈々子
2. 発表標題 先住民社会におけるポピュラー音楽の感性についての考察：グアテマラの事例をあげて
3. 学会等名 日本音楽表現学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 牛島万
2. 発表標題 プエルトリコ大学の学生にみられるレゲトン音楽に対する感性の多様化
3. 学会等名 アフロ・ラテンアメリカ研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 牛島万
2. 発表標題 プエルトリコ音楽レゲトンにみられるアフロ性の探究をめぐる問題
3. 学会等名 九州スペイン研究会 2023年度夏季研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 住田 育法、牛島 万	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 南北アメリカ研究の課題と展望	

1. 著者名 池田光穂	4. 発行年 2022年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 272
3. 書名 『モンゴルはどこへゆく』窪田新一編	

1. 著者名 牛島万	4. 発行年 2022年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 290
3. 書名 米墨戦争とメキシコの開戦決定過程 アメリカ膨張主義とメキシコ軍閥間抗争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>感覚経験の人類学  <a href="https://navymule9.sakura.ne.jp/2020Sensory_anthropology.html">https://navymule9.sakura.ne.jp/2020Sensory_anthropology.html</a>          中米・カリブにおける感覚のエスノグラフィーに関する実証研究  <a href="https://navymule9.sakura.ne.jp/Sensory_anthropology.html">https://navymule9.sakura.ne.jp/Sensory_anthropology.html</a>          感覚のエスノグラフィー：その方法論等の検討  <a href="https://navymule9.sakura.ne.jp/21K18363_kenkyukai221217.html">https://navymule9.sakura.ne.jp/21K18363_kenkyukai221217.html</a>          感覚現象の理解  <a href="https://navymule9.sakura.ne.jp/sensibility_potal.html">https://navymule9.sakura.ne.jp/sensibility_potal.html</a>          感覚の人類学批判  <a href="https://navymule9.sakura.ne.jp/Critique_Sensory_anthropology.html">https://navymule9.sakura.ne.jp/Critique_Sensory_anthropology.html</a>          音と感覚のエスノグラフィー：マヤ・ケクチの民族音楽学  <a href="https://doi.org/10.18910/85580">https://doi.org/10.18910/85580</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池田 光穂  (Ikeda Mitsuho)  (40211718)	大阪大学・COデザインセンター・名誉教授   (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	牛島 万  (Ushijima Takashi)  (50306461)	京都外国語大学・外国語学部・准教授    (34302)	
研究分担者	富田 晃  (Tomita Akira)  (60361002)	弘前大学・教育学部・准教授    (11101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関